

チームラボに聞く、 プロジェクト管理と チームワーク強化の秘訣

テクノロジーを駆使したクリエイティブ集団「チームラボ」。2001年の創業以来、アート事業とソリューション事業の2本柱で事業を展開、支持を広げてきた。ソリューション事業の中核が、クライアントの課題や要望に応じたWebサイト・アプリの構築だ。時には数千のタスクを同時に進行する業務だけに、膨大なタスクやスケジュール管理、クライアントを含むチーム横断的な連携が肝となる。チームラボはそれをどう解決しているのか、取締役の堺大輔氏、カタリストの雪下海香氏と大塚幸聖氏に聞いた。 制作：東洋経済企画広告制作チーム

ヌーラボ

プロジェクトを円滑に進めるチームの要 「カタリスト（触媒）」の役割

——チームラボのソリューション事業で働く雪下さんと大塚さん。「カタリスト」とはどのような役割なのでしょう？

雪下海香氏（以下、雪下） クライアントやエンジニア、デザイナーなどと密にコミュニケーションを取り、プロジェクト全体を円滑に進行させるハブの役割を担っています。単なる業務指示や進行管理にとどまらず、その時々で適した解決策を見つけ、提案する立場です。

大塚幸聖氏（以下、大塚） 私も同じく、主にプロジェクトの進行管理を担当しています。スケジュールの管理からテスト環境の準備まで、進行に必要なすべてのプロセスを管理します。また、仕様変更が必要な場合に適切に対応するなど、プロジェクトがスムーズに進行するよう調整を行っています。

雪下 チームラボにはさまざまなスペシャリストがいます。職種間の調整をしながらプロジェクトを推進するためには、課題が生まれた際の対応や優先順位決めなどが必須です。ゼネラリストとして、その調整役を担うのがわれわれです。

——Webサイトの開発は、期間も長くタスクも膨大だと思います。プロジェクトを円滑に進めるための方針について教えてください。

大塚 最も重視しているのは、課題を可視化し、チーム全員で共有することです。大規模なプロジェクトではタスクが膨大になりますが、進行中のタスクや課題が見える状態を保ち、全員がプロジェクトの進捗状況を把握できる環境にしています。同時に、二重管理を徹底的に避けています。ドキュメントが重複しないように、情報の一元管理を徹底して、認識のズレや無駄

な作業を防いでいます。

雪下 次に、最終的なゴールからぶれないようにすることです。プロジェクトが進行する中で、ゴールが見えにくくなることもあります。その都度、カタリストが目標やマイルストーンに対して必要なことを見極め、優先順位を整理しています。クライアントの要望に応じつつ、最適な解決策を導けるよう心がけています。

——カタリストとして働く中で、課題に感じていることはありましたか？

雪下 カタリストとして重要視しているのが、クライアントから要望をいただいた際に、まずその背景を理解したうえで、クライアントが何を達成したいのかに応じてチーム内で適切な対応策を検討することです。その際には、スケジュールを正しく把握していることが大前提となります。

そのためタスクの把握とスケジュール管理は、プロジェクトの進行を左右する重要なポイントになるのですが、以前のやり方ではプロジェクトの全体像を把握するのが難しく、誰が何を担当しているか、どのタスクが進行中なのかがわかりにくい状況でした。

大塚 また、エンジニアとデザイナー、クライアントとの間で情報が分散し、二重管理が発生することも多く、プロジェクトの進行に大きな支障を来していました。とくに大規模なプロジェクトでは進行状況を把握することが難しく、タスクが未完のまま進行してしまうこともありました。

優れた操作性とUIがBacklogの魅力

——そうした課題を解決する手段として、「Backlog」を導入されました。決め手は何だったのでしょうか？



チームラボ 取締役

堀 大輔氏



チームラボ カタリスト

雪下 海香氏



チームラボ カタリスト

大塚 幸聖氏

堀大輔氏 (以下、堀) ユーザー数やプロジェクト数が無制限の定額制プランがある点に、大きなメリットを感じました。ただ、導入はトップダウンではなく、現場のメンバーの要望を受けて決めました。

チームラボにはボトムアップの文化が根付いていて、私を含めた意思決定層は現場の意見を重要視しています。よいツールを見つけた人が自由に普及活動を始めるので、よいものが自然と選抜されて広まっていくスタイルです。Backlogも、最初は現場のメンバーが自発的に使い始め、使い勝手のよさやUIのクオリティーの高さから徐々に広がり、結果としてチーム全体で標準化されるようになりました。

成田国際空港のWebサイト刷新プロジェクトがスムーズに進行

——プロジェクトの進行に対し、Backlogはどのように貢献できていますか？

雪下 象徴的な事例が、成田国際空港様の公式Webサイトリニューアルプロジェクトです。これは、一般ユーザーに情報を届けやすくするためにWebサイトを改善するというプロジェクトで、コンテンツの再整備やサイト内の導線設計などを行いました。クライアントを含めた複数社、約45名が約1年にわたってプロジェクトを進めました。

プロジェクトの開始後、発生した課題は全部で3,000ほどありました。課題の漏れや二重管理などが発生し、運用に限界を感じたことからBacklogに切り替えました。

大塚 課題の可視化に関しては、Backlogの「親子課題」機能が役立ちました。これは、1つの大きな課題を複数の子課題に分割し、それぞれに担当者や期限を設定できる機能です。これによって、作業の分担や課題の進捗状況が可視化されます。

また、タスクを分割して課題として登録し、関係者が課題にひも付けてコメントを書いていく形式も、とてもわかりやすいと感じています。誰がどの課題をどの程度進めているのか把握しやすくなったことで、進捗管理の抜け漏れを防止できるようになりました。

二重管理の回避については、すべてのコミュニケーションや進捗状況の記録をBacklogに一元管理する仕組みを整えまし

た。以前は複数のツールやドキュメントに情報が散乱していましたが、Backlogに情報を統一することで混乱を防げるようになりました。

——クライアントとのコミュニケーションについてはいかがですか？

雪下 クライアントにもBacklogでのコミュニケーションをお願いしました。すべてのやり取りやタスクが記録に残るので、後々の確認や追跡が容易になります。わざわざやり取りの記録を残さなくても、コミュニケーション履歴がすべて残るので、情報が抜けるリスクが減り、後追いがスムーズになりました。

大塚 BacklogはUIが直感的で非常に使いやすいのも特徴です。程なく、クライアントにもスムーズに使っていただけるようになりました。結果、作業の手戻りの減少やお客様のストレス軽減にもつながったと思います。

——チームワークにおけるBacklogの価値について、実感されていることをお聞かせください。

大塚 Backlog活用でうまくいった方法を、これから新しく始まるプロジェクトに応用できる点はメリットです。過去のプロジェクトで使ったルールやフローがBacklog上にそのまま残っているので、次のプロジェクトにも適用しやすいです。それによりルールづくりや進行管理の手間が減り、確実性のあるプロセスを基にプロジェクトを進められるので、うまくいくことが多いと感じています。

堀 チームラボでは、2001年の創業以来Webサイトの開発を手がけてきました。かつては各自のローカル環境にタスクを記録し、メールでやり取りをする時代もありました。しかし、Webサイトの仕組みや機能は日進月歩で、より複雑な作業や管理が必要になっています。同時進行で抱えるタスクの数も、関わるスペシャリストの数、チームメンバーの人数も格段に増えたと感じています。

だからこそ、プロジェクト管理の正確性やチームワークマネジメントの効率化は必要不可欠です。今では、Backlogがなければプロジェクトが回らないと実感しています。

チームの力を最大化し、組織の競争力を高める「チームワークマネジメント」について詳細はこちら <https://x.gd/Rtg5s>